

今月の谷口雅春先生のお言葉

## 夫婦が調和した家庭を築くために

外面に現れた姿の奥に、

「神の子」の実相がある

人間の实相は「神の子」であり、「仏子」であり、ミコトであります。吾々は吾々の良人の中に、妻の中に、その実相を見て家庭生活を営まねばならないのです。吾々は、互々の人格のうちに「神の子」を見、「仏子」を見、ミコトを見て尊敬しなければならぬのであります。一旦迎えた良人なり妻なりは外面に現れた現象がどうであろうとも、その現象の悪さを以つて、良人そのもの、または妻そのものの悪さと思つてはならないのであ

ります。ジャン・バルジャンが盗みをして盗みをしていない本来善い人間であるところの実相を見て、遂にジャン・バルジャンを善人にしてしまった彼ミリエル司祭のように、吾等は良人又は妻の本来「神」なる実相を見なければならぬのであります。出来るだけ妻は良人の、良人は妻の、欠点を見ないように、暗い方面を見ないようにしなければならぬのであります。肉体人間は「実相仏」ではないから、時には躓くことも、実相が蔽われて悪く観えることもあり得ます。しかしその悪さを実在であると思わないことです。その悪さはやがて過ぎ去り行くべき仮り、その迷いの雲だと思ひ、光り輝く善そのものの良人又は妻の実相を観るよう心掛けよ。

たちまち、その悪さは消え行きて本来「神の子」なる  
良人又は妻の実相が輝き出て、家庭は異常に光明化され  
ることになります。

(新編『生命の實相』第24巻128〜130頁)

## 夫婦の争いをなくすには

夫婦争いなど、お互いにほめ合えば無くなってしまうも  
のであります。誰でもお世辞だと思いがらも、賞めら  
れれば嬉しいものであります。ですから奥さんがいつも  
良人の事をほめることが出来れば、良人は善くなるので  
す。又良人は、いつも奥さんをほめれば家庭の争いなど  
自然に解消してしまふのであります。奥さんが良人に対  
つて、「あなたは偉そうな顔してるけれど、一体あなた  
位、心の汚い人はありません」などといえ、良人も癩  
癩を起して、「お前は私が一所懸命外で働いているのに、  
家でいつものらくら遊んでいる」ともいたくなるもの  
です。いくら「うちの家内は、本当はよく働いているの  
だ」と思っても、癩に障るから、そうはいわない。互に  
悪いところばかり探し合つて言葉の力で、お互の悪い性

質を引き出すようにしていれば、夫婦喧嘩の絶え間はな  
いのであります。(新編『生命の實相』第22巻43頁)

## 夫婦の争いは子供に強く影響する

この夫婦喧嘩というものは、子供の教育に非常に影響  
するのであります。実験心理学の実験に於て、皆さんの  
前に一様に水を入れたコップを入れておいて私が水を飲  
めば、皆さんもその通りに水を飲まれる。それと同じく  
親が心に怒れば、その通り子供の形に現れて来るので  
す。これを児童の模倣性と申しております。親が夫婦喧  
嘩をしているのを子供の時に見せておくと、子供が成人  
して大人になると同じように夫婦喧嘩をするようになる  
のであります。子供を叱る場合などでも、皆さん反省し  
て御覧になれば、きっと、自分が子供の時、親から叱ら  
れた通りの言葉をいって子供を叱りつけている事実  
に、みずから愕然として驚く事があるのであります。それは  
知らず識らずの中に心の中に蓄積された観念が、長い年  
月を経ても失われずに現れて来るのであります。そう考  
えると、何事でも悪い手本は迂濶には見せられないと思

わせられるのであります。

(新編『生命の實相』第22巻43～44頁)

### 良人または妻をよくすることは

およそ相手を良くするには自身を良くすることが第一であります。自身が良くならないのに相手をよくなし得るということは困難であります。そしておよそ自身を良くするための方法は、自分の心の中に光明の精神波動を照り輝かすこととあります。自分の心の中に光明の精神波動が波立っているときその人は善き人であり、自分の心の中に光明の精神波動が波立っていないとき、暗黒の思念が押しつぶさっているとき、その人は悪しき人なのであります。人の欠点を見るとき、その欠点に自分の心が捉われ、それをとやかく言挙げするとき自分の心の中には暗黒の思念が波打たずにはいないでしょう。「暗黒の思念」は決して相手を良化することは出来ないのです。良人をよくしてやろうと思つて小言をいう細君が良人を益々悪くするのは、細君の心の中に「暗黒」の思念が波打っているからであります。細君を良くしてや

うと思つて叱りつける良人が細君を良化し得ないのも、細君を叱るとき良人の心の中には「暗黒の思念」が波立っているからであります。相手を良化しようと思つたらば、先ず自分の心の中から「暗黒の思念」を除去しなければならぬ。先ず自身自身を「光明思念」でみかさなければならぬ——換言すれば相手の悪を見るような心になつてはならないのです。(中略)

妻は良人の実相の円満完全なる姿を見るようにすると、良人と完全に調和してしまふのです。良人は妻の円満完全なる姿を見るようにするとき妻と調和してしまふのです。親は子の実相を、子は親の実相を見、執着の念を捨て、神の完全な護りの中にあることを信じて、相手を神にまかせ預けると、親子は調和したものとなつてしまふのです。そしてその家庭は幸福の家と化し、その生活は天国浄土となつてしまふのであります。

(新編『生命の實相』第24巻161～163頁)

